

## <研究ノート>

# 中国の大学における日本語教育の変化

-日本文化の導入-

段克勤, 陳咏梅, 崎原麗霞, 劉笑非

## Changes in the Teaching of Japanese Language in Chinese Universities---Towards a Culture-centered Approach

DUAN Keqin, CHEN Yongmei, SAKIHARA Reika, LIU Xiaofei

キーワード：日本語教育;言語と文化;文化導入;教授法

Key words: Japanese language classes; Language and culture; Cultural exposure; Teaching methodology

### はじめに

中国の発展と共に、中国における日本語教育も大きな展開を見せ、特にここ十年の発展が速く、いまや英語に次ぐ第二の外国語となっている。とりわけ、中国の大学における日本語教育の大きな変貌は、人材需要の変化が日本語教授法の革新を促したといえよう。学生のコミュニケーション能力を養成する過程において、日本の文化を日本語教育の中にどのように織り込むのか。つまり、日本の歴史、文学、社会、風習などの日本語の基幹となるものを、言語を教えると同時に、如何にして学生に教え、学生による日本への理解を深め、学生の人文的資質を養成するのかは、一つの大きな課題となってきた。大学における専門日本語教育の養成目標は、しっかりとした基礎、高い言葉の運用能力及び比較的高い理論水準を有する、質の高い複合型の高級日本語人材を養成するところにある。単に日本語が話せるだけではなく、日本語でものを考え、文化的含みのある表出ができるように学生を育成しなければならない。そのためには、教育側としては絶えず教育方法の改革を意識し、それをやり遂げなければならない。

各国に異なる言語や文化が存在し、その言語は特定の地域で形成してきたものであり、各国の歴史や文化の真髄がその言語に含まれているゆえ、特定の地域文化を理解しなければ、その言語を真に理解し、精通するに至るのも至難であろう。本稿では、言語学習に伴う文化学習の導入について、とりわけ中国における日本語教育分野において日本文化を如何にして導入するかについて検討を試みたい。

### 1. 中国における日本語教育研究の変遷

日本語教育における文化導入は、日本語教育を行うと同時に文化を導入することをいう。ところが、中国では1980年代まで、「言葉と文化の関係」について日本語習得に関連して専門的に論じたものは数少なかった。また、

この時期は、教授者が一方通行的な授業を学習者に行うというスタイルが一般的であった時期でもある。まだコミュニケーション アプローチの考え方が日本語教育に普及する前段階だったため、日本語に関する知識を学習者に与えることが日本語を教えることに等しいという認識が一般的だった。したがって、日本語を教えるためには、教育内容としての日本語に関する知識を得ることが必要だという認識が一斉に広まったのもこの時期である<sup>1</sup>。

これに対して、80年代に入ってから、その教育内容を「どのように」教えるかという動きが活発になり、90年代後半ごろから、こうした「なにを」「どのように」という動きのなかで、「なぜ」に変えて検討しようとする考え方が登場した。この時期、ようやく言語教育における「文化」とは何か、という議論が湧き起ってきた。これは、すでに60年代からあった言葉と文化の関連をもう一度、「文化」の意味について考え直そうとする動きでもあった<sup>2</sup>。

21世紀になると、日本語教育における文化導入は教育の領域で重大な課題になってきた。

## 2. 日本語教育における文化導入の必要性

日本語教育における文化導入の必要性は以下のように考えられる。

### (1) 言語と文化の関係

言語は文化現象の一つであり、また、文化の重要な構成部分でもある。荒木博之は言語と文化の関係について「言語はその言語を保持する集団の世界観、価値体系を映し出す鏡である。したがって、特定の言語に特定の表現の限られた意味を探るためには、その特定の言語を使用している集団の世界観、価値体系を可能な限り掘り下げてみる必要がある」<sup>3</sup>と論述している。言語と文化は互いに依存しあっている。言語を通じて社会の文化知識を把握することができると言える。

### (2) 中日文化の違い

特に、他国と違って、中国と日本は文化的ルーツを共有している部分があるため、中国人学習者は日本文化を誤解する可能性はより大きいと考えられる。中国と日本は、ほぼ同内容の儒教と仏教の伝えを受けながらも、異なる大陸文化と島国文化を誕生させた。そのため、両国の文化の相違性を認識させる必要性が高まる。

外来文化の受け入れ方について、日本は「積極摂取型」<sup>4</sup>であるといわれている。明治維新以後、日本政府が「文明開化」を打ち出し、積極的に欧米文化を導入すると同時に、儒教、仏教及び神道などの既存文化をアレンジし、欧米文化との合致に務め、日本特有の近代文化を形成させた。また、外来文化を吸収する過程において、「衝突、共有、融合」という文化構造が徐々に築き上げられ、日本人の判断基準にまで影響を及ぼした。そのため、「和」を中心とする意識が社会の基盤となり、文化、思想、社会心理及び生活のすべての領域において、日本人の判断基準である「相対主義」「折衷主義」が確立され、言語の構造にも表れている<sup>5</sup>。逆に、外来文化に対して、中国は「消

極摂取型」<sup>6</sup>であるといわれている。長い歴史の中、中国文化は優越感を伴い、周辺国に広がったが、文化中心地とする自慢が鎖国のきっかけとなり、外来文化に対する抵抗感は時代を問わず、強かった<sup>7</sup>。

要するに、中日両国の文化の底辺に同じ要素が存在しているにもかかわらず、大きな相違も見られる。そのために、日本語教育において、中国人学生に中日文化の相違性を積極的に解釈し、日本文化を理解させた上での授業はさらなる効果が期待できるであろう。

### 3. 日本文化導入の内容

中国では一般的に文化は二種類に分類されている。社会、政治、経済、文学、芸術、歴史、哲学、科学技術などが知識文化に分けられ、社会の風習、生活習慣、思考方式と行為の規範などが交際文化あるいは常識文化に分類されている。日本語教育における文化導入の内容は広義的に言えば、日本の文化と中国の文化であるが、狭義的に言えば、導入する「文化」の内容は主に交際文化である<sup>8</sup>。

ここで、挨拶を内容とする授業を例に説明する。中国人は人に会う時に「どこに行かれますか」とか「召し上がりましたか」と、話しかけるが、結局、相手の行き先や食事の有無を詮索するのではなく、単なる親しさをあらわす挨拶に過ぎない。逆に、日本人が人に会う時に、「こんにちは。いいお天気ですね」とか「最近よく降りますね」と、天候に関するものがよく持ち出され、それも挨拶の一部と見なされるが、たとえ「どちらへ」と具体的な質問を投げても、返ってくるのは「ちょっとそこまで」といった曖昧な返事である。また、電話に出る時の応答も異なる。中国人は電話を受ける時に、よく「もしもし。どなたですか」「どちらをお探しですか」と、声をかけるのに対して、日本人は電話をかける時も受ける時も、まず自分の姓名と会社名を名乗ってから会話を始める。そのほか、中国人は食事をするときに、開始と終了の社交辞令をあまり重んじなく、家で来客を招待する時でも、軽い合図で食事の開始を示す。逆に、日本の食卓において、食前の「いただきます」及び食後の「御馳走様でした」を、丁寧に話さなければ躰が足りないと白い目で見られるだろう。

このように、日本独特な交際文化の中に、特に言語行為として特徴を表しているのは、お祝いやお悔やみを述べる言葉、日ごろの挨拶、曖昧な表現、相槌、敬語表現などが取り上げられる。集団意識が強い日本社会において、人間関係の「調和」は重要なポイントであり、日常生活の衝突を避けるために曖昧な表現、相槌、敬語表現などの言語行為は欠かせない潤滑剤である。こういった文化的裏付けを解釈しない限り、中国人日本語学習者は真のコミュニケーション能力を身につけられないのであろう。

### 4. 日本文化導入の注意点

#### (1) 授業中導入する文化の量について

では、日本語授業の中に、いかなる量の日本文化の導入が適切なのか？現場の教員はその分量に頭を悩ませることであろう。表面に接するだけでは学習者は完全に理解できないし、深入りしすぎると、本末転倒で日本語

の授業が成り立たず、日本文化の授業に変えてしまう。故に授業を行う時に、文化導入の比率をきちんと事前に把握する必要がある。そのために、教員は絶えず研鑽を重ね、教員の自己体験と結び付けて、導入の時機を計らい、授業開始前、授業中、授業の終了前に、時間を振り当て適宜に導入すべきである。

## (2) 教材の選択について

教材を選ぶことは重要である。教材を選ぶ時、その教材がどのような教授法を想定し、どのようなシラバスに基づいて作られているかを検討すべきである。どのレベルの学習者のためか、どのような学習目的の学習者に適用するかという点から検討する必要がある。また、会話の部分は日本の原版会話を選んだほうがよいと思われる。原版会話は易しい上、日本文化の各方面にかかわるので、学生の学習によりよい効果をもたらすことができる。

内容からいえば、時代に適応するものを選ぶのが大切である。広範囲において日本文化に触れるテキストを選ぶべきである。日本での日常生活体験が欠けている中国人日本語学習者にとって、教材の中の日本人学習者のリアルな生活体験、学習内容は、日本語学習、日本社会への理解につながる貴重な情報源になる。

また、教材の中に中日比較性の問題にも注意を払わなければならない。日本文化と中国文化には共用点もあれば相違点も多々ある。日本語教育における文化導入の過程において、中国と日本の文化を導入する際、相違点を導入するのが最も重要である。学生に両国の文化の比較を通して日本人の行動様式及びそこに隠されている思惟方を説明することも必要である。

## (3) 導入する文化の実用性について

また、実用性の問題も重要である。教員として、日本文化のすべてを授業で説明することが不可能である。授業をする際、代表的な文化及び実用性がある文化を導入すべきである。例えば、日常礼儀や商務礼儀などがそれである。言語と関連する文化を理解することができれば、言語をしっかりと把握することができる。なお、導入する文化を日常生活と密接に関連づけることができれば、学生の学習意欲を高めることもできるのであろう。

## 5. 授業以外の文化導入

無論、非日本語環境では、日本文化のイメージを作り上げる際の素材としての情報、知識が少ない上に、そのリソースも非常に限られている場合がある。時には、イメージすら持てないほど、情報、知識が不足していることもありうる。こうした環境の中にいる学習者は、自分が見聞きした日本に関する知識を確認する場、または情報、知識の獲得を日本語教育、あるいは日本語教員に求める傾向が強い。

### (1) 教師の提示

さて、このような立場にある教員が何を提示すればいいのか。つまり、本来実体のない「日本の文化」をどう提示すればいいのか。それは、教員自身の経験から得た「自分の中にある日本文化」を語る以外にない。しかし、非日本語環境に於いては、日本語教員の語る「日本文化」が予想以上に強い影響力をもっているため、鵜呑みにされる危険性はつきまとう。このような危険性を避けるために、学習者に出版物やインターネットの利用及び日本人教師との付き合いを勧めるのは無難であろう。

## (2) 出版物及びインターネットの活用

日本語教員以外の「日本文化」を取り入れるために、学習者は勉強の主体として日本の出版物、雑誌や小説などを通して日本の社会構造、行動パターン、風俗習慣、社会交際などリアルに接することができる。また、現代社会では、インターネットという便利なものがある。学習者はインターネットを通して最新のニュースや日本社会の動きを把握することができる。また、いろんなサイトで生け花や茶道などの日本の伝統文化に関する知識を学習し、テレビ番組や映画を通して日本社会を身近に観察することができる。さらに、各大学には日本人教師が招聘され、教鞭を取っているため、日本人教師との接触は、日本語の練習だけではなく、日本の社会生活、風俗習慣を理解するチャンスをもたらしてくれる。このように、テキストにない、より真実な日本社会を学習者に理解させることによって、真の日本文化が伝わることであろう。

## 終わりに

中国の大学における日本語教育が目指すところは、学習者が日本語を習得し、日本語で表現し、コミュニケーションができるようになるということである。そのため、非日本語環境にある学習者に日本文化の相違性を積極的に解釈し、日本文化を理解させた上での授業は大きな効果が期待されることであろう。

段克勤（北京林業大学 外国語学院）

陳咏梅（北京林業大学 外国語学院）

崎原麗霞（鳥取大学 国際交流センター）

劉笑非（北京林業大学 外国語学院）

---

注

<sup>1</sup> 柳宗和『日語與日本文化』中國湖南教育出版社 1999

<sup>2</sup> 張紅嶺「跨文化交際與日語教育」『日語學習與研究』中國對外貿易大學出版社 2005

- 
- <sup>3</sup> 荒木博之『日本語から日本人を考える』朝日新聞社 1980 p40-60
- <sup>4</sup> 南博『日本の自我』吉林出版社 1989
- <sup>5</sup> 同注 4
- <sup>6</sup> 同注 4
- <sup>7</sup> 同注 4
- <sup>8</sup> 張占一「交際文化鎖談」『語言教學與研究』北京大學出版社 1992 第 4 號

#### 参考文献

- 宿久高「二十一世紀中日關係展望」『日本學論壇』東北師範大學 2003 年 第 3 號
- 荒木博之『言語と文化の關係』朝日新聞 1980
- 金田一春彦『日本語の言語表現』講談社 1992
- 細川英雄『言葉と文化を結ぶ日本語教育』凡人社 2002
- ネウストプニー『今日と明日の日本語教育』アルク 2000
- 飛田良文「異文化接觸論」『日本語教育学シリーズ』おうふう出版 2001
- 陳申『語言文化教學策略研究』北京語言文化大學出版社 2001
- 柳宗和『日語與日本文化』中國湖南教育出版社 1999
- 張紅嶺「跨文化交際與日語教育」『日語學習與研究』中國對外貿易大學出版社 2005
- 南博『日本の自我』吉林出版社 1989
- 張占一「交際文化鎖談」『語言教學與研究』北京大學出版社 1992 第 4 號